

麗澤アーカイブズの近世人口経済資料
—速水融氏寄贈資料のメタデータベース構築—¹

黒須 里美

キーワード：宗門・人別改帳、アーカイブ、メタデータベース、速水融

要旨

歴史人口学アーカイブ（麗澤アーカイブズ）は2006年に名誉教授・速水融氏から歴史人口学関係の貴重な資料の寄贈を受けて設立された。本稿は麗澤大学「人口・家族史研究プロジェクト」が進めてきたアーカイブズの「近世人口経済資料」を俯瞰できるメタデータベース構築と検索プログラム作成の経緯と現在を整理する。さらにメタデータベース利用の課題・可能性と、近世人口経済資料の学際的・国際的研究資料としての価値を議論する。

1. 麗澤アーカイブズと人口・家族史研究プロジェクト

麗澤大学「人口・家族史研究プロジェクト Population and Family History Project（以下、PFHP）」（黒須里美代表）は、2006年に名誉教授・速水融氏から歴史人口学関係の貴重な資料と書籍の寄贈を受けてスタートし、それらを「歴史人口学アーカイブ（麗澤アーカイブズ）」として整理更新してきた。特にこの5年間は文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「人口・経済・家族の長期的研究：多世代パネルデータベース構築」（事業番号S1591001L 2015-2019年度）に採択され（以下、基盤形成事業）、歴史人口学研究拠点形成を目指し、様々な媒体の資料を俯瞰できるメタデータの整備と利用のための検索プログラム修正・更新作業が飛躍的に進んだ。本稿では「歴史人口学アーカイブ（麗澤アーカイブズ）」設立の経緯を整理し、特にその中の「近世人口経済資料」の現在を示し、学際的・国際的研究資料としての価値を議論する。

速水融氏から寄贈を受けたのは歴史人口学関連の膨大な図書と資料であった。当時の学長・梅田博之氏は、公開シンポジウム（2006年12月16日）において、速水融氏の資料と書籍の「歴史人口学アーカイブ（麗澤アーカイブズ）」としての受け入れと、人口・家族史研究プロジェクトの発足を記念してご挨拶された。そして、①保管と整理・研究の場として図書館スペース（3,4階）を確保すること、②外部資金の導入努力、③研究は経済社会総合

¹ 本稿の準備にあたっては、共同研究員の高橋美由紀氏（立正大学）、PFHPスタッフの持田敏子氏にご協力いただいた。記して感謝したい。

研究センターのプロジェクトのひとつとして立ち上げることに、④継承の役割を筆者が引き受け、且つ後継者の養成の任にも当たるという条件がクリアできたことで受け入れが実現できた経緯を述べられた²。

具体的には以下の8種類の資料が寄贈された。それぞれの点・冊数は、寄贈時ではなく、その後の物理的整理とPFHP追加入力も含めた2019年度はじめの状況を示している。

- (1) 歴史人口学関連図書 1,900冊
- (2) 府県統計書(複写) 4,350冊
- (3) 原史料 約1,300点
- (4) 画像史料約1660町村(約32,250町村・年)
- (5) 画像史料の紙焼き 約4,500冊(約800町村)
- (6) BDS(Basic Data Sheet: 史料を解説し世帯・個人をリンクした基礎整理シート)約470町村(約9,960町村・年)
- (7) 「個票」「移動情報 ITS」「家族復元 FRF」など速水融氏が研究のために作成した整理シート 約150町村・種類
- (8) BDSを入力したデジタルデータ 約10万人

この他にも、点数確認のできていない江戸の古地図から昭和に至る大量の全国各種地図がある。さらに、2006年以降に寄贈された特定研究資料として、(a)新型コロナウイルス感染症拡大によって現在再着目されている速水融氏の『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ-人類とウイルスの第一次世界戦争』(藤原書店)の研究資料となった大量の関連書籍と新聞の切り抜き、(b)成松佐恵子氏が『陣屋日記を読む』(雄山閣)『庄屋日記に見る江戸の世相と暮らし』(ミネルヴァ書房)などで利用された守山藩の御用留や西松家文書(美濃国西条村)日記の紙焼と読み下し文などもある。

上記リストのうち、(1)と(2)については既に大学図書館に登録され、利用許可を得て館内閲覧が可能となっている³。本稿で扱う「近世人口経済資料」は(4)-(8)の資料である。PFHP

² 2006年プロジェクト発足記念公開シンポジウム報告書『資料が語る日本の人口・家族・社会』(黒須里美編2007.3)および「学長挨拶」(学長室 Website 「歴史人口学セミナーの開催にあたって」<https://www.reitaku-u.ac.jp/president/presidents/presidents04/20110901-103.html>)。資料の保管と整理・維持と研究の発展の重要性を強調された公開シンポジウムにおけるスピーチでは、その実現にあたって協力をしていただいた当時の小野宏哉副学長、田中駿平常務理事、今村稔学務部長などのお名前をあげられている。その後、日本で最初に「アーカイブ」の設置を提唱した民間の学者が、麗澤大学の創業者、廣池千九郎であったことを2016年の人口学会大会ホスト校としての学長挨拶として中山理氏が述べられ、麗澤大学と人口学との関連の中で本アーカイブが紹介された(<https://www.reitaku-u.ac.jp/president/smile/20160614-8099.html>)。

³ 登録においては図書館職員の皆さまの多大なご協力を得た。(3)は人口資料以外も含む古文書で、リストが別途作成されている。

では、様々な外部資金を得て、宗門・人別改帳を中心とした物理的資料整理とデジタル化を進め、データベースを構築するとともに、そのデータを利用した人口・家族・経済の長期的研究と国際比較研究に取り組んできた。以下では、まず近世人口経済資料の内容とメタデータベース構築の経緯を整理する。次に検索プログラムについての作成過程と利用法を整理し、集計データからわかる資料の収集状況を示す。おわりにアーカイブの課題と資料を利用した研究展開の可能性を議論する。

2. 近世人口経済資料

近世人口経済資料の中心は、1960年代から速水融氏がまさにライフワークとして収集整理分析してきた「宗門・人別改帳」である⁴。その多くは速水融氏が研究代表になつた2つのプロジェクトによる大規模な資料収集による。まず一つは、慶應義塾大学を拠点に行った1986年の「近世人口史料調査」である。二つ目は、1995-1999年度に京都の国際日本文化研究センターを拠点に行われた「ユーラシアプロジェクト」（文部省科学研究費創成的基礎研究・新プロ）での調査収集である。1980年代後半の資料収集結果を補う形で広範囲に地域を網羅する努力がなされた1990年代の収集資料の詳細については、鬼頭宏氏によってユーラシアプロジェクトの報告書にまとめられている⁵。

宗門・人別改帳は日本における前近代の人口・家族の研究に利用される資料である。現在の国勢調査（静態統計）と出生・死亡・移動などの動態統計を合わせたような記録で、地域によっては毎年の記録が残存し、かつ克明な経済指標（持高・牛馬数等）も含むことから、その内容の豊富さは歴史人口学の老家である西欧のデータ（教区簿冊などを利用した家族復元）をしのぐ。名も無い庶民のヒューマン・ドキュメントから歴史を見直せるという貴重な資料は一つの「文化遺産」であると、速水融氏は2019年の暮れに急逝されるまでその可能性を語り続けてきた（速水 2006; 2020）。

宗門改帳は、キリスト教取り締まりのために寛文11年（1671）にその作成が全国的に命じられたとされる（速水 2007）。人別改帳は名前の通り、人口改めであるため、寺に属しているという宗門の情報はないが、それ以外は宗門改帳とほぼ同様の情報が掲載されている。史料作成の方法と残存状況には地域差があり、「現住地」と「本籍地」のいずれの情報も示しているか、乳幼児死亡を含めた記録の漏れがどのくらいあるのか、「一筆」という記録の単位が世帯を示しているかどうか、など様々な史料の特徴や制約への注意が必要である。し

⁴ 宗門・人別改帳の他にも、増減帳、五人組帳、送り状、日記などの画像資料も含まれている。

⁵ 『最終報告書』1. 歴史人口学の項目の1.2 史料収集参照。特に重点が置かれた西日本の収集については村山聡氏によってまとめられている。これらの報告は「ユーラシア人口・家族史プロジェクト」として（故）浜野潔氏によって2000年まで関西大学のホームページ上で管理されていた。ご遺族と関西大学の了承を得て、現在は、麗澤大学人口・家族史研究プロジェクトホームページに移行し、閲覧可能となっている。 <http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/pfhp/eap/japanese/1.htm>

かし、福島県、長野県、岐阜県などで長期に続く史料は、個人の一生のみならず、世帯のつながりを最大8世代まで追うことも可能である。同じ戸籍型の東アジアの史料と比べても、その詳細度と信頼度は秀でている (Dong 2015)。

このように優れた内容を持つ資料であるので、保存や利用の面での課題は共有されなければならない。先に示した通り、資料は紙焼、BDS など、様々な紙媒体で保存されているものと、マイクロフィルムがほとんどであった。特にマイクロフィルムについては劣化が常に問題となってきた。基盤形成事業において、マイクロフィルムと BDS のデジタル化を進めることができたのは保存と管理の効率化の両面での改善となった⁶。どちらも、麗澤大学図書館の「貴重書利用規程」に則り、利用申請をした上で、図書館 4F の PFHP 室で検索ができるように整備中である。また、画像史料や紙焼の利用については、オリジナル所蔵者へのコンタクトが必要な場合もあるので注意が必要である。近世人口経済資料は基本的には公的資金を利用して収集整理したものであり、成果として公開が原則であるものの、プライバシー保護及び著作権・所有権に関わるものがあることを留意したい⁷。

3. 近世人口経済資料メタデータベースの作成経緯

メタデータベースの基となったのは、速水融氏が寄贈にあたって作成されたリストであった⁸。寄贈資料は膨大な数であり、媒体も多様であったため、PFHP では資料の収納場所を紐付けるという目的で「検索プログラム」作成がスタートした⁹。共同研究者の高橋美由紀

⁶ しかし、全てがデジタル化できたわけではない。また、資料のデジタルファイルは、本稿で示すメタデータベースそのものに紐づけてはいない。

⁷ ユーラシアプロジェクト後半に紙焼製本の移管や画像入力 of 許可について、史料所蔵者への問い合わせが行われ、資料共有のための整備がなされた。史料所蔵機関における管理者の交替や史料の個人所有者の死去などもあり、問い合わせが難しくなっている場合も多い。この点は原史料を利用する研究者にとっては大きな問題となる。PFHP ではユーラシアプロジェクトの方針に則り原史料 (画像・紙焼) の扱いに注意し、貸出は行わず、これらをベースとした研究成果として BDS の利用について、速水融氏のご意向に沿い、研究活用ができるように本メタデータベースの作成を心がけている。BDS に関する研究上の問題は黒須 (2008) 参照。またユーラシアプロジェクト後、国際日本文化研究センターで落合恵美子氏を代表とする研究会で共同利用の試みがなされ、資料の内容とその収集からデータベース化までの詳細がまとめられている (森本・平井・小野 2015)。

⁸ そのため、いわゆる「書誌情報」ではなく、歴史人口学研究に利用するための便宜的な情報に整理されてきたことには注意が必要である。

⁹ 作成初期段階に基盤研究(A)(H16-H19)「長期的視点による人口変動とその構造的要因」(代表: 津谷典子; 分担: 黒須里美)、基盤研究(B)(H17-H19)「近世日本の歴史人口学データベースを利用した比較地域分析」(代表: 浜野 潔; 分担: 黒須里美) の支援を受けた。

氏（立正大学経済学部教授）の協力を得、実質的な作業はPFHPスタッフの持田敏子氏を中心に行なった。この5年間は、基盤形成事業の一環として、さらにメタデータベースとしての目的を持って拡充・発展させてきた。具体的には、(a)膨大な数の資料の効率良い所在把握、(b)各村の作業進捗状況の可視化、(c)研究者ニーズに応えるべく地域や年数など条件を設定した検索の追加、という3点を中心に改善を図ってきた。

メタデータベース作成にあたって問題になった点をいくつか整理する。まず、様々な資料を関連付けるキー（主キー）となるのが町村名である。しかし、原史料の宗門・人別改帳に記載されている村名に統一性があるわけではない。緯度経度が同じ地点の村であっても異なる漢字表記となっている場合や、作成時期によって村の名称が変わる場合もある。村の統廃合もあれば、時代によって国名や郡名も違うこともある（例、福島県を含む国名が江戸時代では陸奥国だが明治期には岩代国であるなど）。このような歴史資料特有の問題だけでなく、原史料から解読者や研究支援者の手を介してBDSが作成され、さらにそこから2次分析資料（例えばITS, FRF）を作成する場合に、本来の村名でなく、作業をする上で便宜的に簡略化されて使われてきた村名で書かれているものもある。

さらに、30年以上にわたる複数のプロジェクトを経て、長年の資料収集と整理がされる際に、基本的には『旧高旧領取調帳』（木村礎校訂、東京堂出版、1995）をベースにして行われていたものの、必ずしも統一したコード表が作成されていたわけではなかった。『旧高旧領取調帳』の村名に数字コードを入れる形式と、該当書に記載されていない村名については別途紙媒体に書き込む形式での更新が行われていた。そこで検索プログラムの基本となる「地名リスト」の作成にかなりの労力と時間を割くことになった。歴史民族博物館の「旧高旧領取調帳データベース」を参考にして照合し、村名とコードの見直しが図られた¹⁰。そこで照合できない村については各県の『日本歴史地名体系』（平凡社地方資料センター）や現在の市町村のインターネット情報を利用して確認追加が行われた。また『旧高旧領取調帳』では扱われない都市・町については、基本的には、『郡区町村一覽』（内務省地理局）を基準にしている。しかし、一覽にない町については、BDS作成の多くを手掛けられた成松佐恵子氏が作成された手書きのリストを解読した整理が必要となった。さらに所在地のわからない町村については、原史料に戻って読み間違いがないかなどの確認もなされた。このような膨大で煩雑な作業を経て、地名リストが完成してきた。しかし、地図化するにあたっては現在の地図を利用しているため、村名が判明しても、緯度経度を比定するのが難しい場合も多い¹¹。つまり、検索のキーとなる地名（国・郡・町村名）が一致しないとエラーになり、

¹⁰ 歴史民族博物館「旧高旧領取調帳データベース」は https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/kyud/db_param。煩雑なこれらの作業についてはPFHPスタッフの菊池裕理子氏、また当時PFHPスタッフであった高橋純子氏の尽力なしにはなし得なかった。

¹¹ 資料該当地の緯度経度比定にあたっては地域・研究アシスト事務所への委託と、長岡篤氏の協力を得た。詳細は黒須・長岡・高橋（2017）、および本号の長岡・黒須・高橋参照。

検索用データベースに入らない。現在の緯度経度と一致しないと、地図上に表示できない。そのためエラーチェックと更新には終わりが無い。他にも、検索プログラムのより効率的な利用のための史料分類項目の整理や資料を活用した研究論文の整理も作成中である。

様々な課題に取り組みながら、本データベースの更新が続いている¹²。完璧なものを目指すのではなく、利用しながら修正更新していくという柔軟な態度が必要である。現在は地図機能、集計グラフ表示機能も含めてより汎用的な使い方になってきている。本稿入稿時点では以下に紹介する検索プログラムはPFHP内での利用が可能であるが、近々オンライン検索も可能にすべく整備が進んでいる。速水融氏の寄贈リストからはじまったこれまでの経緯を思えば、時間はかかったものの大きな成果と言える。

4. 近世人口経済資料メタデータベースの検索プログラム

本節では、メタデータベースの内容がどう整理されているか、主な内容について検索プログラムの画面(図1-4)を表示しながら示す。検索プログラムとは、(株)システムプラネットに委託して開発してきた近世人口経済資料メタデータベースのWeb検索システムである¹³。Web検索システムとデータ挿入システムの2つの機能から構成されており、データの登録・更新はExcelで準備したものをデータベースに登録する方式をとっている。

図1は資料の検索画面である。例として、「岩代」国、「安積」郡で、BDSが作成されている村を検索する。その検索結果として図2が表示される。それぞれの町村について各資料の有無、また画像、紙焼、BDS、石高については何年分があるかが示されている。例えば郡山上町には135年分のマイクロフィルム、132年分のBDS(整理用の個人番号付)、132年分の石高情報が存在することがわかる。また国土地理院のサービス(<http://www.gsi.go.jp/>)を利用して9町村が地図上に示され、緯度経度表が示される。ここでは白地図の例を示しているが、現在の衛星写真や交通網などを含む標準地図での表示も可能である。

9つの町村から、郡山上町を選択すると、資料の物理的所在と各年情報の有無がリストされる(図3)。郡山上町の資料は1709年(宝永6)から1870年(明治3)まで継続しており、このリストの和暦年を一つ選ぶと、その年の人別改帳が入っているマイクロフィルムのコードや、史料の所蔵者(この場合は郡山市歴史資料館)が示される(図の掲載なし)。さらに、まだ試験的段階ではあるが、郡山上町のように人別改帳が入力された町村については、人口・世帯の推移を示す機能も追加した(図4)。

図4について注意したいのは、あくまでも人別改帳からわかる人口と世帯の数ということである。人口は天明の飢饉の1780年代後半と天保の飢饉の1830年代後半に大きな減少があったことがわかるが、その後回復し、全体の傾向としては幕末に向かって人口が増大し

¹² PFHPではユーラシアプロジェクト以降もBDS作成やその入力が続いている。

¹³ 「資料整理・検索プログラム」の開発にあたっては、PFHPスタート時から長年にわたり(株)システムプラネットの石井晶氏に根気強いご協力をいただいた。記して感謝したい。

ている。具体的には1729年の793から1870年の2,606まで、人口は3倍に膨れ上がった。ただし、例えば、1757年、1784年、1798年、1859年のスパイクは実際の人口の変化ではなく、資料が一部しか存在していないことを示している。

The image shows a web-based search interface for the Reitaku University Population and Family History Project. The header includes the project name in Japanese and English. Below the header is a navigation bar with 'ホーム > 検索条件入力' and a user name 'skurosu : ログアウト'. The main search area is titled '検索条件' and contains several sections:

- 地名**: Country (岩代), Prefecture (伊豆, 安房, 安房, 河沼, 会津, 大沼, 耶麻), and Village (text input).
- 現在の都道府県名**: Text input for the current prefecture.
- 資料年**: Search criteria for years, including 'のみ', 'から~まで', '以降', and '以前'. It includes fields for Western (西暦) and Japanese (和暦) years.
- BDS残存年数**: Text input for the number of years since the BDS.
- 村高**: Text input for the village height.
- デジタル化情報**: Text input for digitalization information.
- 史料分類**: Text input for document classification, with an example: '例. 人口、宗門改帳、人別改帳、戸籍、増減帳、五人組帳、送り状、日記、他'.
- データの有無**: A list of checkboxes for various data types, with 'BDS情報があるもの' selected.
- 整理管理コード**: Text input for the management code, with an example: '史料画像マイクロ:M1234 / BDS:B123'.

At the bottom of the search area are buttons for '検索' (Search) and '検索条件の初期化' (Reset search conditions). The footer contains the copyright notice: 'Copyright ©, Reitaku University PFHP. All rights reserved.'

図1 メタデータベース：資料検索プログラム



ホーム > 検索条件入力 > 検索結果一覧 skurosu : ログアウト

▶ [検索条件](#) [ヘルプ](#)

検索結果一覧 : 9件中 (1 - 9件目) ※単位:村・年 ※個人No:BDS個人番号付があり

コード	国・郡・郷組・村	史料画像	紙焼	BDS	石高各年	デジタル化	ITS・FRF等	閲覧情報	活用情報
0105040000051	岩代 安積 郡山上町	135	-	132 個人No	132	○	○	-	○
0105040000052	岩代 安積 郡山下町	65	-	66 個人No	68	○	○	-	-
0105040000070	岩代 安積 日出山村	148	37	126 個人No	126	○	○	-	-
0105040000090	岩代 安積 笹原村	35	11	130 個人No	128	○	-	-	-
0105040000240	岩代 安積 片平村	-	2	2	1	-	-	-	-
0105040000261	岩代 安積 大槻村上町	48	50	50 個人No	-	-	-	-	○
0105040000262	岩代 安積 大槻村下町	21	21	20	-	-	-	-	-
0105040000310	岩代 安積 下守屋村	162	42	150 個人No	139	○	○	-	○
0105040000340	岩代 安積 駒屋村	44	44	44 個人No	39	○	-	-	-

Copyright ©, Reitaku University PFHP. All rights reserved.



/ 緯度・経度 9 件

- "0105040000051",岩代,安積,,郡山上町,二本松藩,"140.38535","37.39373889"
- "0105040000052",岩代,安積,,郡山下町,二本松藩,"140.38535","37.39373889"
- "0105040000070",岩代,安積,,日出山村,二本松藩,"140.3803389","37.37322778"
- "0105040000090",岩代,安積,,笹原村,二本松藩,"140.3787722","37.36304444"
- "0105040000240",岩代,安積,,片平村,二本松藩,"140.3070083","37.42048056"
- "0105040000261",岩代,安積,,大槻村上町,二本松藩,"140.3159028","37.38708889"
- "0105040000262",岩代,安積,,大槻村下町,二本松藩,"140.3204833","37.38873333"
- "0105040000310",岩代,安積,,下守屋村,二本松藩,"140.2504889","37.33886667"
- "0105040000340",岩代,安積,,駒屋村,二本松藩,"140.3021167","37.36094722"

図2 検索結果1 : 岩代国安積郡 BDS を持つ町村の詳細情報と地図

麗澤アーカイブズの近世人口経済資料
 —速水融氏寄贈資料のメタデータベース構築—
 黒 須 里 美

村名	岩代 安積 郡山上町	町村別名	-
国郡村コード	0105040000051	コード8	05040051
郷・組名	-	EAPコード	-
藩名	二本松藩	北緯	37.39373889
現在の都道府県名	福島県	東経	140.38535
史料画像 所持年数	135	史料画像 所在情報	キャビネット:MF16
BDS 所持年数	132	BDS 所在情報	キャビネット:AB2 W1 W2 ボックス:8,9,10,11,12,13, 244,245,246,247,248, 249
石高各年 所持年数	132		
デジタル化 所持年数	1		
ITS・FRF 所在情報	キャビネット:64・65・66 67・68・69・70・71/J2 J3		
備考	-		
人口・世帯情報	あり		
ザビエルコード	05040051		

全表示モード

- : データなし / ○ : データあり / ◎ : データあり(史料分類指定に該当) / 図書No : 図書館コード指定に該当

和暦	西暦	史料画像	紙焼	BDS	石高各年
貞享04	1687	○	-	-	-
元禄02	1689	○	-	-	-
元禄07	1694	○	-	-	-
元禄08	1695	○	-	-	-
宝永06	1709	○	-	○	○
宝永07	1710	○	-	○	○
宝永08	1711	○	-	○	○
正徳01	1714	○	-	○	○
享保04	1719	○	-	○	○
享保05	1720	○	-	○	○

図3 検索結果2 : 岩代国安積郡郡山上町の資料所在と各年情報

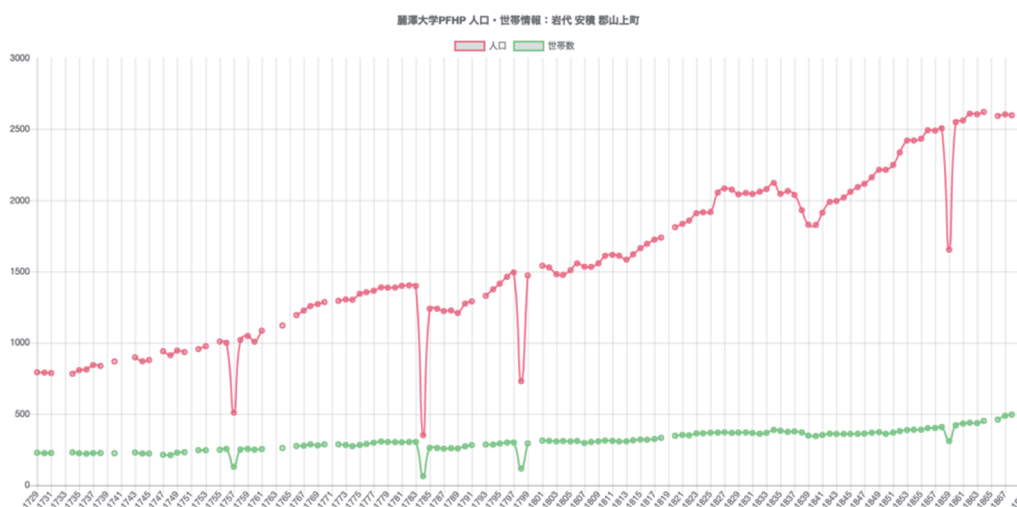


図4 人口と世帯の年次推移 : 郡山上町の例

5. 近世人口経済資料メタデータベースが示す歴史人口学の課題と可能性

上記では岩代国安積郡、そしてその内の郡山上町についての例を示してきた。対象を絞る検索をしたが、一方で、全体を把握するために、検索プログラムを利用し、地図をメタデータベースから作成することもできるようになった(図5)¹⁴。

このように地図に描いて可視化することによって、収集資料の集中している地域と全くカバーされていない地域や、リサーチトピックを検討することができることは学際的データ共有に向けての大きな進歩である。また、先に郡山上町で示した資料継続年のチャートを全ての町村で、年毎、国毎、郡毎に集計したものを表示できるようになった(図の掲載なし)。どの時代のどの地域に人口経済資料が残されているのかという情報(手掛かり)は、今後、学際的共同研究を行なっていく上で重要である。

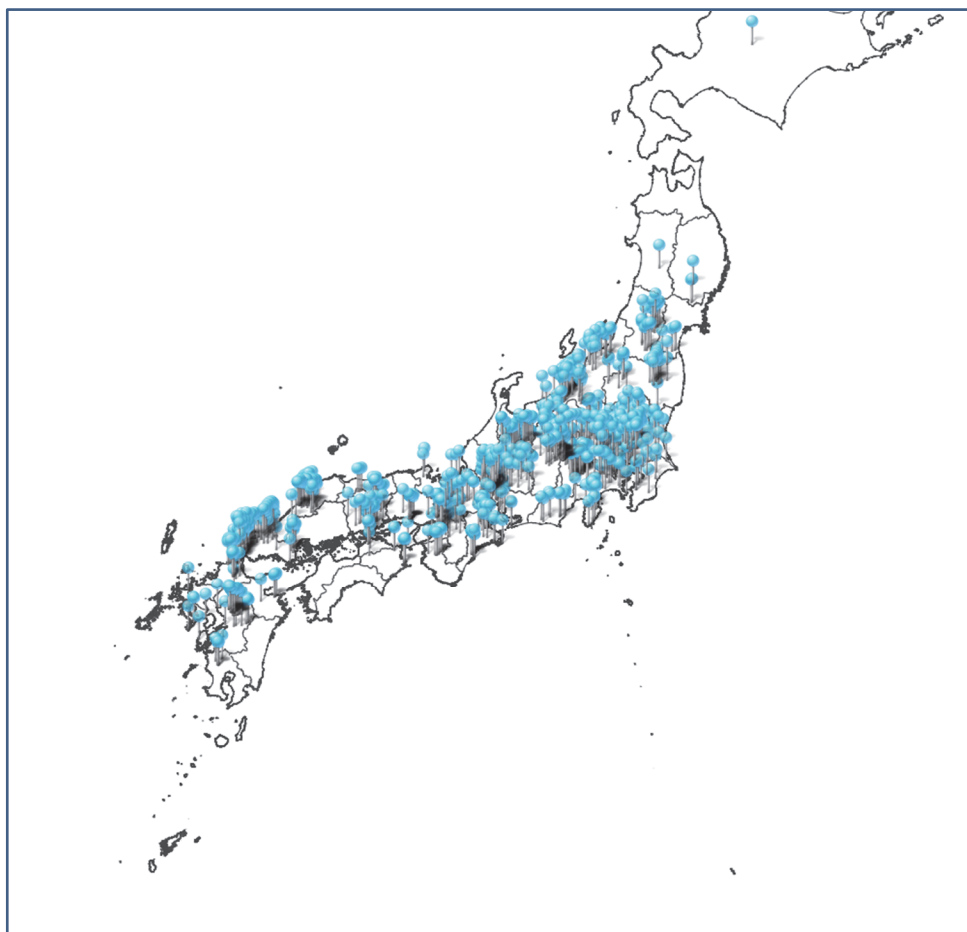


図5 資料収集地域地図

¹⁴ ユーラシアプロジェクト時代、速水融氏が国際日本文化研究センターのプロジェクト室に収集した町村の位置を示した地図を掲げていた。たくさんの赤い虫ピンが白地図の上に刺されていたものであったが、まさにそれをデジタル化したのが図5である。

歴史人口学の研究ではこれまで長期に継続する良質なデータが中心的に利用され、海外比較研究の対象にもなってきた(Bengtson, Campbell, et al. 2004; Tsuya, Wang, et al. 2010; Lundh, Kurosu, et al. 2014)。さらに分析の視点や方法を変えれば、長期に継続していなくても、つまり単年、または短期しか継続していない宗門・人別改帳であっても、人口や世帯構造を描くことで地域的な差異を追うことも(例:黒須・金親 2015)、さらに同居児法(世帯の母娘をマッチさせ、両者の死亡率を推計して出生率を推計する方法)を使った出生力の後方推計などから出生力の推移を追うこともできる(例: Drixler 2016)。近年では、西欧の歴史人口学資料からは入手困難とされる地理的移動情報を活用した研究(黒須・長岡・高橋 2017; 本号の長岡・黒須・高橋)や、世帯の持高を利用した徳川農民社会の資産分配の研究(Kumon 2020; 有本・黒須 2020)など、これまでにないリサーチトピックへの活用も進んでいる。今後、このメタデータベースがより多くの利用者の目に触れることによって、近世人口経済資料の様々な利用価値が生み出されるだろう。

現在、東アジアや欧米をはじめとする歴史人口学の研究者が歴史人口ビッグデータに取り組み、新しいアプローチや分析法を含めた共同研究が盛んになっている。同時に、日本国内においては、様々な分野の研究者が歴史ビッグデータの構築に取り組み、繋がり始めている¹⁵。PFHPにも、海外の歴史人口研究者のみでなく、国内の古気候や地震の研究者もデータに関心を持って来訪している。また、世界の有望な若手研究者が本データベースを活用し、国際的評価を得てもいる¹⁶。歴史人口学アーカイブ(麗澤アーカイブズ)がより学際的国際的舞台上での「文化遺産」としての価値を発揮できる時期が到来している。

¹⁵ 例えば、人文学オープンデータ共同利用センター「歴史ビッグデータプロジェクト」(<http://codh.rois.ac.jp/historical-big-data/>)。

¹⁶ 例えば Dong Hao は麗澤アーカイブズの歴史人口データを利用して、香港科技大学の博士論文を完成した。その論文が認められて米国プリンストン大学でポストドクターとして採用された。現在は東アジアの若手歴史人口学者としても認識され、北京大学の准教授となり、黒須とのコラボレーション論文が国際的評価の高い学術雑誌に採用された(Dong and Kurosu 2017; Dong et al. 2015, 2017)。公文譲は本アーカイブズの石高データを利用して博士論文(“Rich Europe, Poor Asia: How Wealth Inequality, Demography and Crop Risks Explain the Poverty of Pre-Industrial East Asia, 1300-1800”)を提出し Economic History Association での優秀な博士論文(non-US or Canadian)に贈られる Alexander Gerschenkron Prize を受賞した(<https://eh.net/eha/prizes/economic-history-association-prizes-and-awards/>)。イタリア・ミラノのボコーニ大学でポストドクターとなり、次年度からは Toulouse Institute of Advanced Studies でポストドクターとなる予定で、研究協力が今後も継続する。

参考文献

- 有本寛・黒須里美 2020 (近刊) 「徳川日本農村の資産分配：二本松藩仁井田村(1720-1870年)を事例に」 一橋大学経済研究所『経済研究』71(3): 1-23
- 黒須里美 2008 「長期マイクロデータをめぐる動向：歴史人口学研究の舞台裏」 『人口学研究』43: 49-56
- 黒須里美・金親真理子 2015 「結婚と家族から見る地域差と社会経済階層差～幕末維新期6地域の比較～」 麗澤大学紀要 98: 33-41
- 黒須里美・高橋美由紀・長岡篤 2017 「『ザビエルデータ』から復元する移動ストーリー～近世庶民の人口移動研究資料～」 『言語と文明』15: 139-150
- 速水融 2020 『歴史人口学事始め』ちくま新書
- 速水融 2007 『歴史人口学の世界』岩波書店
- 森本一彦・平井晶子・小野芳彦 2016 「歴史人口学の資料とデータベース」 落合恵美子 (編) 『徳川日本の家族と地域性-歴史人口学との対話-』第16章 ミネルヴァ書房
- Bengtsson, Tommy and Cameron Campbell and James Lee et al. 2004 *Life under Pressure: Mortality and Living Standard in Europe and Asia, 1700-1900*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Dong, Hao, Cameron Campbell, Satomi Kurosu, Wen-Shan Yang and Jame Z. Lee. 2015. "New Sources for Comparative Social Science: Historical Population Panel Data from East Asia." *Demography* 52(3):1061-88.
- Dong, Hao and Satomi Kurosu. 2017. "Postmarital Residence and Child Sex Selection: Evidence from Northeastern Japan, 1716-1870." *Demographic Research* 37: 1383-1412.
- Dong, Hao, Matteo Manfredini, Satomi Kurosu, Wenshan Yang, and James Z. Lee. 2017. "Kin and Birth Order Effects on Male Child Mortality: Three East Asian Populations, 1716-1945." *Evolution and Human Behavior* 38(2): 208-216.
- Drixler, Fabian 2013 *Mabiki: Infanticide and Population Growth in Eastern Japan, 1660-1950*. Berkeley: University of California Press.
- Kumon, Yuzuru 2019 "The Deep Roots of Inequality." *Mimeo*.
- Lundh, Christer, Satomi Kurosu, et al. 2014. *Similarity in Difference: Marriage in Europe and Asia 1700-1900*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Tsuya, Noriko O., Wang Feng, George Alter, James Lee, et al. 2010. *Prudence and Pressure: Reproduction and Human Agency in Europe and Asia, 1700-1900*. Cambridge, MA: The MIT Press.